

「テルマエ・ロマエⅡ」 ★★★★★

2014（平成26）年3月1

1日鑑賞<東宝試写室>

監督：武内英樹

脚本：橋本裕志

ルシウス（古代ローマの生真面目すぎる浴場設計技師）／阿部寛

山越真実（お風呂専門雑誌のライター、本当は漫画家志望）／上戸彩

古代ローマ人

ハドリアヌス（テルマエでの平和的統治を願う第14代ローマ皇帝）／市村正親

ケイオニウス（女ぐせの悪い次期皇帝候補、北方パンノニアで国境警備中）／北村一輝

アントニウス（ハドリアヌス帝の誠実なる側近）／宍戸開

マルクス（ルシウスの友人、陽気な性格）／勝矢

アケボニウス（最強グラディエーター）／曙

コトオウシュヌス（新人グラディエーター）／琴欧州

平たい顔族（日本人）

山越修造（真実の父、のんびり屋）／笹野高史

館野（全身傷だらけの謎の湯治客）／竹内力

山越由美（真実の母、しっかり者）／キムラ緑子

峰子（湯もみショーの女）／松島トモ子

ラーメン屋店主（昔ながらのラーメンと餃子が自慢）／白木みのる

浪越徳三郎（指圧の神）／菅登未男

三郎（炭焼き小屋の老人）／いか八朗

2014年・日本映画・113分

配給／東宝

<『テルマエ』は面白い！これぞエンタメ！>

私は『テルマエ・ロマエ』の前作（12年）を中国旅行の飛行機の往復の中で観たが、ビールとワインを飲み、機内食を食べながらの鑑賞には最高だった。ところどころ寝ていても大筋はわかるが、逆に面白いところでは、目を皿のようにして・・・。

原作はヤマザキマリの超ベストセラー・爆笑コミック『テルマエ・ロマエ』（全6巻）だが、「すべての“風呂”は“ローマ”に通ず」という信念(?)と、古代ローマ人VS平たい顔族（日本人）という設定が秀逸だ。また、その映画化にあたっては、NHK大河ドラマスペシャル『坂の上の雲』での秋山好古のようなシリアスな役から、本作のような超コミックものまで変幻自在に演じ分けることのできるカッコいい俳優、阿部寛の存在感が大きい。独り言のセリフが多くなると、ストーリー展開がシラけてくるものだが、ローマと現代日本を何度も行き来するルシウス（阿部寛）のカルチャーショックがあまりに大きいだけに、その独り言には何とも言えない、とぼけた説得力(?)がある。

また、『武士の献立』（13年）でしっかり者の女房役を演じた上戸彩が、前作でも本作でもお風呂専門雑誌のライター・山越真実役としてルシウスの案内役になっているが、その明るいキャラも本作に最適。もちろん、これは『麦子さんと』（13年）の堀北真希でもOKだが、多分上戸彩の方が適役だろう。ちなみに、『もらとりあむタマ子』（13年）の前田敦子にやらせてみれば、どうだっただろうか・・・?そんな興味もあるが・・・。

<「和平派」と「武力行使派」の対立の中、なぜテルマエを?>

第73回アカデミー賞作品賞を受賞した、ラッセル・クロウ主演の『グラディエーター』（00年）は、『ベン・ハー』（59年）と同じように歴史大作でありながら、素晴らしいエンタメ作品だった。しかして、本作でもそれに負けず劣らずの(?)コロッセオ（円形闘技場）や最強グラディエーターのアケボニウス役で元横綱の曙が登場するので、それに注目!

ストーリーの軸は領土の一部返還を含めた「和平路線」を目指すハドリアヌス帝（市村正親）と、あくまで旺盛な領土拡大を目指す「武力行使派」の元老院との対立の中、ルシウスがハドリアヌス帝から「テルマエ・ユートピア」の建設を命じられることだ。3月9日から大阪で始まった大相撲春場所では、注目の若手・遠藤は初日から鶴竜、日馬富士、白鵬というモンゴルの「三重鎮」の前に3連敗したが、これはきっと後々の糧となるはずだ。もっとも、ルシウスがタイムスリップしたのはそんな大阪ではなく、東京だったが、そこで力士たちが使っている足つぼ用の踏み板やマッサージ器、入浴剤にルシウスは大感激。力士たちがこれで癒されるのなら、グラディエーターだって!そう考えたルシウスがこれをコロッセオのテルマエで再現すると大人気に!なるほど、なるほど。ちなみに大関を陥落し大阪場所では関脇として出場している琴欧州も新人グラディエーターとして登場する等、面白い話題も満載だ。

<一大温泉レジャーランド施設の効用は?>

愛媛県松山市出身の私は、「四国の大将」と呼ばれた「来島どっくグループ」の坪内寿夫が奥道後に開発した一大温泉レジャーランドの楽しさをよく知っている。また、サウナが大好きな私は、ローマの元老院の議員たちがやっていた「サウナでのバスタオル談義」を日本にも持ち込んだら、と密かに考えている。したがって、テルマエの仕事を一生の仕事と考えかつ、それをローマの平和のためと位置づけてまい進しているルシウスはエライ!今や日本の建築界の重鎮となった安藤忠雄氏も、今後の設計思想にこれを取り入れてもらいたいものだ。

もっとも、戦後69年間続いた平和と安定の中で「平和ボケ」した日本人を心配している私としては、「武力行使派」の元老院議員が担ぎ出した次期皇帝候補のケイオニウス（北村一輝）のニセモノ（北村一輝）が主張する、「のんびりテルマエに浸かって平和ボケしていてもいいのか!」との問題提起にも一理あり、と思ったが・・・。

<「平たい顔族」の温泉文化を、そっくり持ち込めば・・・>

温泉療法（治療）という言葉があるくらいだから、温泉に浸ってのんびりすれば健康にいいのは当たり前。温泉天国の日本には、その上「指圧の心は母ゴコロ」をうたい文句にした、指圧療法や鍼灸療法もある。さらに最近では、大人用の温泉スパはもちろん、子供用の遊園地にもウォータースライダーがある。さらに温泉街には、ストリップ小屋はお勧めできないが、おすすめの名物ラーメン店や射的場等もある。さらに、草津の湯でみる「湯もみショー」も楽しいものだ。

したがって、山越真実や真実の父・修造（笹野高史）、母・由美（キムラ緑子）、さらに、全身傷だらけの謎の湯治客・館野（竹内力）、ラーメン屋店主（白木みのる）、湯もみショーの女・峰子（松島トモ子）等から教わった、これらの「平たい顔族」の「名物」をそっくりそのままローマに導入したルシウスはたちまち大人気に。もっとも、テルマエ事業は成功の連続だったが、女ぐせは悪いながらもローマのために献身しているケイオニウスの病氣（結核らしいが、大丈夫?）やハドリアヌス帝の病氣というアクシデントが続く中、ローマの「政情」はちょっとした臭い雰囲気・・・。

ルシウスはハドリアヌス帝の誠実な側近アントニウス（宍戸開）と共にゴッドハンドを持つ指圧の神・浪越徳三郎（菅登未男）をローマに連れ帰ることによって事態の転換をはかりつつ、「テルマエ・ユートピア」の建設にまい進したが、さてその成否は・・・?

<「テルマエ・ユートピア」には男女混浴を!>

ローマにもかつて「男女混浴」があったが、風紀が乱れたため廃止されたらしい。テルマエ設計技師のルシウスはそれを当然のことと考えていたが、草津温泉に来てみると、アレレ・・・。本作のロケ地として使われた草津温泉の「湯畑」や「熱の湯」の風景は実に美しい。また、老いも若きも、夫婦連れや真実のような美女までも、みんな仲良く混浴を楽しんでいたから、ルシウスが作る「テルマエ・ユートピア」は絶対男女混浴にしなければ・・・。しかし、「戦闘には銭湯を!」と考えた(?)ハドリアヌス帝もさすがに男女混浴までは許可してくれなかったらうえ、奴隷たちを使いながら掘り続ける温泉源になかなか辿り着けなかったから、ルシウスの周辺は少しイライラ気味だ。

そんな中、コロッセオの中での殺し合いは更に残忍さを増し、ケイオニウスのニセモノと元老院によるハドリアヌス帝の「蹴落とし策動」がいよいよ現実・・・。もちろん、ルシウスやアントニウスはこれに反対したが、逆にそこに紛れ込んでいた真実が魔女として捕えられ処刑されることになったから大変。ここまで事態が悪化すれば、もはやテルマエ設計技師ルシウスの力だけではどうしようもなし。そう思ったところで「どどー」と地響きのような音が鳴り響き、みんなが注目する中、温泉の噴出が・・・。これにて、一気にテルマエ・ユートピアは草津温泉と見まちがうような一大温泉郷として成立したが、さて、そんな温泉の力によってローマ人の健康は、また、ローマ人の心は変わるのだろうか?

本作ラストにみる男女混浴の風景を見ると、すべては万々歳の結果になったことは明らかだが、きっと計画されているであろう、『テルマエ・ロマエⅢ』では、この「テルマエ・ユートピア」をめぐるいかなる展開に・・・?